

御朱印と御城印

鈴木 敬一

SUZUKI Keiichi

川崎地質(株)
(本誌編集委員)



1. 御朱印ブーム

御朱印ブームだそうである。ある程度大きい書店の地図や旅行に関する書籍のコーナーには「御朱印」と銘打ったコーナーがあるくらいである。これらの書籍の中には「御朱印集め」というキーワードも目立つが、御朱印の意味は「神仏とのご縁の証」であり、集めるという言葉は少しそぐわない感じがする。観光地でも有名な東京都台東区にある金龍山浅草寺で御朱印を頂いた時に「御朱印を頂く前には写経するくらいの気持ちが欲しい」という主旨のことが書かれた紙を頂いた。それくらい有難いものであり、お守りと同様のものであるという気がする。御朱印を頂くようになり、それぞれの神社仏閣のご本尊やご神体を黒々とした墨と朱色の印で構成されていて、お参りした日付をいれてもらうと何とありがたい感じがしてくる。この御朱印ブームに乗って、季節限定などの工夫を凝らして、御朱印を集めさせるようにしているのではないかと神社仏閣があるのも事実であり、少し残念な気もする。コロナ禍の今、外出自粛の折であるため、なかなか遠出してまで御朱印を頂くことは難しい。現在は、自転車でお参りできる場所を選んでいただくようにしている。

写真1は岐阜県可児郡御嵩町にある願興寺というお寺で頂いた御朱印である。このときはたまたま業務の出張で、少し時間があつたため頂くことができた。COVID-19の感染予防のため、最近は直接御朱印帳に記載していただくのではなく、予め和紙などに書いておいた御朱印を頂く機会が多い（書置きという）。御朱印を記載する用紙は、通常は白色であるが、書置きの場合は色のついた紙が使われることもある。

願興寺は別名「蟹薬師」と呼ばれている。池に蟹に乗って薬師様が現れたと伝えられることからそのように呼ばれている。写真1の中央の朱印には蟹

があしらわれているのはそのためである。左側の方には「可児才蔵生誕寺」とある。可児才蔵は戦国時代の槍の名手で、関ヶ原の戦いでは17の首をとり、戦国最強の武将ともいわれている。

2. 御城印

お城を訪れた記念として、販売されているのが御城印である。ダムカードやマンホールカードも静かなブームであるといわれているが、御城印についても解説書が書店に並ぶようになった。御城印は基本的に印刷物であり、御朱印とは似て非なるものである。かつて観光地のお土産屋さんには必ずあったペナントのようなものである（ペナントがわからない方はそれなりの年齢の方に訊いてみてください）。従って、御城印を御朱印帳に貼ることは厳禁であり、貼ってしまうと神社仏閣で御朱印を頂けなくなるので注意が必要である。

御城印には、二条城などの有名どころのものもあるが、筆者はあまり知られていない山城の御城印を収集している。岐阜県御嵩町の隣にある可児市の美濃金山城の御城印を写真2に示す。基本的な構成は御朱印と同じであるが、印刷物であるため御朱印よりカラフルである。御朱印と同じように訪れた日付けを記入するようになっている。

美濃金山城は地名に兼山とあるため兼山城と表記されることもある。1537年に築城された城で、2013年に国史跡に指定された。このあたりは昨年のNHK大河ドラマ「麒麟がくる」の明智光秀のゆかりの地が多く、観光資源として活用するために山城をPRしたいという地元の意気込みを感じる。御城印は、道の駅や近くの商店などで販売していることも多く、インターネットで検索すると購入場所を調べることができる。

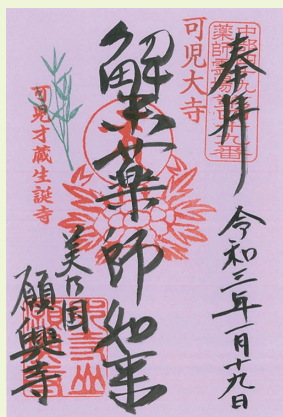


写真1 岐阜県御嵩町にある
願興寺（蟹業師）の御朱印



写真2 美濃金山城の御城印



写真3
美濃金山城からの眺め
(2018年3月30日撮影)

3. 山城の魅力

最近ちょっとした戦国ブームで、テレビ番組でもお城のランキングを決めるような番組などが放映されている。お城というと天守閣を指してお城と思われる節があるが、城という字を分解すると「土」と「成」である。つまり土で成ったものがお城であって、天守や櫓あるいは堀や石垣だけが山城ではない。山の山頂付近に築城されたものを山城、低地の河川や堀で取り囲んで築城したものを平城と分類することもある。

山城でも特に鎌倉から戦国時代にかけて築城された中世山城と呼ばれる城は、自然の地形をうまく利用している。中世山城は天守や櫓などの建造物は失われていることが多く、石垣などが残っている程度の場合が多い。しかし、興味深いのは地形である。大抵の場合、半島状に突き出た断崖の場所に築かれる。こうすると防御は半島の付け根の部分だけに集中することができる。この部分に溝を掘ると外からの城内に侵入することは難しい。この溝は堀切と呼ばれる。もちろん水は張っていないので空堀と呼ばれる。半島状に突き出た断崖が一部で存在しないときは石垣を築く。半島状に突き出た地形は、眺望が良く、敵が攻めてきたときも遠くから発見しやすい。

このように山城は地形をうまく利用しているが、当時は詳細な地形図や精密な測量技術も無いはずである。絵図などは残されているが、これを参照しながら築城することは実際には難しい。現在であれば、レーザ測量などの技術を用いれば、三次元の詳細な地形を比較的簡単に得ることができるが、当時は恐

らく築城のための土木技術者が、山をくまなく歩いて、頭の中に三次元の詳細な地形を描き、設計したのであろう。

地形だけでなく、地質をうまく利用した城もある。長野県小諸市にある小諸城は浅間山の火砕流堆積物の上にある。堀に石垣が無いと簡単に斜面を登れると思うが、実際に登ろうとすると崩れてきて登ることができない。地質を熟知しているのである。

山城では水の確保も重要である。山の上なので井戸を掘るしかないが、どこに掘れば地下水が得られるかということも山を歩いて、経験的にわかっていたに違いない。

石垣を築く際には、石垣に使う石をどこから調達するか、それも考えなくてはならない。現代でもダムを建設する際には、石材をどこから調達するかが地質調査の項目に入っている。山城を築く際も同様の検討が必要であり、現在のような調査手法が無い時代にどのように調査を行っていたのかを考えると大変興味深い。

山城は眺望が良いと書いたが、写真3は美濃金山城からの眺めである。桜の満開の時期に撮影したものであるが、満開の桜がおくまで続き、その先には比較的なだらかな花崗岩の山が果てしなく続いている。このような眺望の良さにも山城の魅力を感じる。